

中学校及び高等学校における 総合的な学習の時間の学びに対する学習者の意識調査

福 島 知 津 子

A Study on University Students' Perceptions on the Learning through the subject of Integrated Studies at Secondary Schools

Chizuko Fukushima

抄 録

平成 14 年（2002 年）度より総合的な学習の時間という科目が実施され、17 年が経過する。当時、本科目の目標は「実際の社会において活用できる資質・能力の育成」を目指して創設された。中学校・高等学校での総合的な学習の時間において学んだことがどのような印象として残っているのかについて、高等学校卒業後数年経過した、現在は大学生となった元学習者を対象に調査を行った。調査の分析結果は、おおむね総合的な学習の時間に対する肯定的な意見が示された。テキストマイニングによる計量分析を行った結果、職業体験や国際理解に関する学びは特に印象が強いという結果を得た。さらに、中学校での学びは職業体験、高等学校での学びは国際理解が強く肯定的な印象を残していることが明らかとなった。

キーワード：総合的な学習の時間、意識調査、テキストマイニング

(2019 年 9 月 25 日受理)

Abstract

In Japan, lower secondary schools started teaching the subject of Integrated Studies in 2002 and upper secondary schools started teaching it in 2003, following the stipulation by the Course of Study. This paper aims to uncover perceptions of the university students who experienced the purposeful activities in the subject of Integrated Studies at secondary schools. The results show that the participants have positive impressions on the learning through the subject of Integrated Studies at each level of schooling. The quantitative analysis using text mining indicates the participants have a strong positive impression on job experience in class during their lower secondary school while they have a strong impression on international understandings during their upper secondary school.

Keywords: the subject of Integrated Studies, perceptions of the participants, text mining

(Received September 25, 2019)

1. はじめに

総合的な学習の時間は、全国の小・中学校では平成14年(2002年)度から導入され、高等学校においてはその翌年、平成15年度(2003年)から学年進行で実施され、今年で17年が経過する⁽¹⁾。この科目が創設される際に目標とされたことは、総合的な学習の時間は、「実際の社会において活用できる資質・能力の育成を目指して創設された時間」とされた(田村、2017)。それが、平成20年(2008年)の学習指導要領の改訂に伴い、学習方法として「探求的な学び」が明示された(中野・加藤、2015)。さらには、平成29年(2017)年告示の学習指導要領の総合的な学習の時間の目標の中でも最重要視されているのが、「探求的な見方・考え方を働かせ」といわれるもので、これは「主体的で対話的で深い学び」に不可欠と言われている(田村、2017)。文部科学省は平成29年学習指導要領改訂の経緯の説明に、この「主体的で対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進のための6つの留意点を記載している。6つの中でも探求的な学びに通ずる内容3つを以下に引用する。

- イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。
- エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。
- オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

(MEXT、2017¹:5)

各教科においても「主体的で対話的で深い学び」を通して、事実に知識から概念を導くという学びのプロセスは、まさにこれまで総合的な学習の時間で望まれていた「探求的な学び」に相通ずるものがある。MEXT(2017)の文部科学省も指導要領改訂の経緯の中でも、総合的な学習の時間が担っている学習者の伸長させるべき能力は、「探求的な学び」を通じて、まさに、「主体的で対話的で深い学び」と異なることはない、と述べている。

もうひとつ、総合的な学習が求められている根拠がある。ベネッセ教育研究開発セン

ターが実施した総合的な学習の時間に関する調査（2013）には、総合的な学習の時間削減に反対する保護者の意見が増加しているという結果である（朝日新聞、2013）。「学校教育に対する保護者の意識調査」によると、平成20年に行った調査の一部に総合的な学習の時間に関する項目がある。総合的な学習の時間の削減案に「賛成」または「どちらかといえば賛成」が48.0%であったが、平成24年には23.8%に減少している。このことが示唆していることは、保護者は家庭においてこどもとの何らかのやりとりを通して、総合的な学習の時間にいくぶんか、そして何らかの効果を感じている可能性が高い。

2. 総合的な学習の時間の目標

中学校における総合的な学習の時間は第1学年においては50時間、第2学年では70時間、第3学年では同じく70時間となっている。高等学校における総合的な学習の時間は学年ごとに決められているわけではなく、3年間を通じて、3～6単位となっており、学校ごとに柔軟に取り入れられるよう定まっている。平成28年（2016年）度に公布された中学校及び平成30年（2018年）度に告示された高等学校学習指導要領の総合的な学習の時間の目標を以下に引用する。

【中学校】第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 探求的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探求的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。
- (3) 探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

(MEXT、2016；159)

【高等学校】第1 目標

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

(MEXT、2017²；641)

総合的な学習の時間において育成すべき資質・能力を平成29年(2017年)告示の中学校学習指導要領の目標と平成30年(2018年)告示の高等学校学習指導要領の目標を確認した上で、実際にそれらを身に付けるための具体的な探求的な学びについては次章にて見ていくこととする。

3. 探求的な学び

学習指導要領にある総合的な学習の時間の目標を実現するにふさわしい探求的な学びについては、中野・加藤(2015年)に次のような6つの特徴を示している。

- 1) 課題解決のためのサイクルを身につけることができる
- 2) 疑問を解決するために他者と協同するようになる
- 3) 学習に対する肯定的な態度を育てることができる
- 4) 多面的に考え、物事の本質を捉えることができる
- 5) 自ら考え、自ら行動できるようになる
- 6) 新しい情報に対して開放的になる

(中野・加藤、2015:8-10)

さらに、これらの特徴をもつ探求的な学びへと導くための手立てに不可欠なものは、①珍しさ、②複雑さ、③不明確さ、④葛藤を感じさせる(番号は筆者による)の4点であると提示している。

奈須(2017)はそれをより具体的な課題に反映したものが以下の探求課題であると提示している。それらを課題ごとに分類すると、以下4種類の課題にまとめることができる。

- 1) 横断的総合的な課題：国際理解、情報、環境、福祉・健康
- 2) 地域や学校の特色に応じた課題：地域の暮らし、伝統と文化
- 3) 生徒の興味・関心に基づく課題
- 4) 職業や自己の将来に関する課題

中学校で実施された探求課題に関する実態調査は、文部科学省によって全国レベルで実施されている。福島(2018)では平成14年(2002年)度と平成27年(2015年)度に把握された実施状況調査の結果をまとめた。この13年間で全国の中学校で実施された探求課題の経年変化を見るためにもここで再掲する。平成14年と平成27年の調査結果の差異について、課題の分類が細分化されているため単純比較はできないが、キャリアに関わる課題が大幅増加となっている点が目立っている。

表 1：平成 14 年度調査（MEXT, 2004）

学習活動 (%)	横断的・総合的な課題					生徒の興味 関心に基づ く課題	地域や学校 の特色に応 じた課題	その他
	国際理解	情報	環境	福祉・健康	その他			
第 1 学年	23.1	28.9	46.8	44.3	43.7	45.7	68	10.5
第 2 学年	26.5	25.8	38.7	44.2	51	50	64.3	12
第 3 学年	35.3	28.6	35.9	46.1	49.8	56.1	58.8	11.8
全体平均	28.3	27.8	40.5	44.8	48.1	50.6	63.7	11.4

平成 14 年の調査の課題には、「生徒の興味関心に基づく課題」という項目が設定されていたが、平成 27 年には生徒が興味を持ったものというよりは、教師が先に課題を設定し、生徒に興味や関心を持たせるように促すという、課題発見の順序が変わっている点がふたつ目の着目点である。

表 2：平成 27 年度調査（MEXT, 2016）

学習活動 (%)	国際理解	情報	環境	福祉・ 健康	伝統・ 文化	防災	まち づくり	キャリア	社会と 政治	その他
第 1 学年	14.4	20	35.2	38.4	45	21.4	15.3	65.6	2.2	18.5
第 2 学年	15.6	19.2	24.3	29.3	43	19.5	10.1	88.8	4.1	18.4
第 3 学年	22.6	20.5	22.4	34.7	47	19.2	12.1	80.2	8.5	18.7
実施学校数	29.5	26.1	42.8	55.3	65.5	25.3	21.2	93	10.1	25.5

ただし、両校種の目標の (2) と (3) をみれば、社会との接点は不可欠である。在学中に社会との接点を学校が機会を探求課題として提供し、その後将来、実際の社会生活で活かすことができれば、本科目の目標は達成されていると言える。総合的な学習の時間の目標が達せられているか、または達成されつつあるといえるのか、「現在の生活に活かされている」や「[総合]での学びが、今の生活や仕事等に影響しているか」というアンケート方式で調査を行っている先行研究を見てみる。前述したように、本科目は実施されてから 17 年の経過という背景から、社会人や大学生となった元学習者を対象とした追跡（または回顧）アンケート調査を基にした研究はここ 1、2 年で目にされるようになった。高橋（2018）は複数の大学、その在学生へ高等学校での回顧調査を依頼し、総合的な学習の時間に関するアンケート調査を行っている。ただし、探求的な課題を分類し、因子分析をした結果を提示しているが、それぞれの因子がどのように関係しているかについては言及していない。また、増田・平櫛他（2018）は Web 上で高等学校を卒業した社会人を対象とした総合的な学習の時間に関するアンケートを 227 名に実施し分析を加えている。テキストマイニングで使用された語の頻度を抽出している。七里（2005）によると、滋賀県はその地域の特性を活かした琵琶湖に関する学びを昭和の時代から実践している土地で、現在まで滋賀大学教育学部附属中学校が琵琶湖での体験や学びを総合的な学びがどのように学習者の印象に残っているのかを継続調査をしている。卒業生たちの声が細やかに拾われて提示されている。そこで本研究は、中学校及び高等学校において総合的な学習の時間を通して得られた学びについて、卒業後の元学習者の意識にどのような印象が残っているの

かについて調査、分析することで、本科目の今後に必要なとされる課題を見つけることを目的とする。

4. 調査

4.1 調査内容

調査の目的は、中学校及び高等学校にて計6年間の総合的な学習の時間（以下、総合学習と記す）においてどのようなことを学び、さらにはどのような活動が各校で多く実践されたのか、それらは中学校と高等学校を卒業した後の現在において、学習者の意識にどのような印象があるかについて明らかにすべく、アンケート形式にて調査を実施した⁽²⁾。

調査の時期は2019年9月中旬である。調査対象は、大阪府内にある大学の学部所属の3クラスである。学年の構成は大学1年生が23名、2年生が26名、合計49名である。無効と判断された回答は2名、よってデータとして処理された有効回答は合計47名分となった。調査対象は文系大学所属の1年生から2年生までの49名（男女含む）である。選択形式の設問には4件法の回答（1. 全然そうではない、2. あまりそうではない、3. まあそうだ、4. まったくその通りだ）を設定し、それらの回答理由には記述回答を設定している。探究活動の分類は、前章の紹介した奈須（2017）を参考にし、4分類に「その他」を加え、1. 「ものづくり・生き物作り」、2. 「地域に貢献する・地域のことを調べる」、3. 「国際理解教育/環境問題/福祉・健康」、4「職業体験/自分史や家族史」、5. 「その他」と選択肢を5分類と設定した。

調査方法は、英語科目の授業の一部を利用し、本研究従事者以外の授業担当者によって記述式アンケート形式にて約10分間で実施された。

4.2 調査結果

上記の調査にて得られたデータをコンピューターに入力し、特に、4件法にて回答する設問の平均値を産出した。4件法の回答は記述統計にて、記述回答はテキストマイニングの使用ソフトにはHK Coder2（安定版）を使用している。これにより4件法の回答と記述回答はクロス集計され、さらに抽出語同士の関係が図式化されることが本論の主眼である。この分析方法では本データから一般化を導くことを目的とせず、単純に選択した4件法を数値で分析しただけでは見えてこない記述回答と4件法から選択した数値とのクロス集計を図式化した中に彼らの本音を見出すことが可能である。

まず、表3に記述統計のまとめを記す。「1. 中学校または高等学校での総合的な学習の時間（以下、総合学習と記す）で学んだことがこれまでの生活および現在の生活に活きているという実感がある」という設問には平均値が2.49となっている。同種の質問肢3つの中では、最も低い値を示している。

表3：総合的な学習の時間の学びについての印象 (N=47)

1. 中学校または高等学校での総合学習が実生活に生きている実感がある	2.49
3. 中学校での学びが将来に活かそうだ	2.67
4. 高等学校での学びが将来に活かそうだ	2.55

※最大値 4.00 から最小値 1.00 の平均値

加えて、この3つの質問肢から、中学校または高等学校での総合学習での学びが今後活かされるであろうと参加者自身も感じている、または期待していることがわかる。それは次の表4の結果にも関連している。最も印象に残っている総合的な学習の時間における活動時期は中学校のほうだと回答した人数が高等学校だと回答した人数よりも多いという結果を得た。時期に関しては無回答や「どちらか覚えていない」というものもあった。

表4：最も印象に残った総合学習の活動時期

Q	中	高	?	合計
N	26	17	4	47

一方で、それらの活動期間は次の表5にあるように、ひと月未満のものが最も多い。1学期通して計画された総合学習はきわめて少なく、その一方で複数年にわたる総合学習の活動も10件とひと月未満の活動の次に多いという結果となった。学習指導要領に示された年間計画を設定していると思われる、1年にわたる活動は4件にとどまった。

表5：最も印象に残った総合学習の活動の実施期間

期間	1月未満	2～3月	1学期	1年間	複数年	不明	合計
N	17	6	1	4	10	9	47

さらに、校種別の印象に残った総合学習における活動事例のまとめを示す。次の表6は、最も参加者の印象に残ったものは、中学校における総合学習の活動事例であり、それに回答した参加者の具体的な活動事例である。

表6：中学校での総合学習にて最も印象に残っている活動内容

1	ものづくり・生き物を育てる	—
2	地域学習	学校周辺の清掃 / 解体業（太鼓の製造過程） / 地域のこと / かまぼこ工場見学
3	国際理解教育・環境問題・福祉や健康	英文を読んで討議
4	職業体験・自分史 / 家族史	職業体験 / 自分社説
5	その他	戦争 / 人権 / 差別問題 / いじめ / 文化祭準備 / 席替え / 講演

中学校における総合学習の活動例として最多の回答は、職業体験であった。その他、地域学習、人権に関する学習が多い。中には、「戦争ばかりだった」という記述もあった。一方、次の表7は、高等学校における総合学習の最も印象に残った活動事例である。

「人権」とは異なるカテゴリーとはなっていない、参加者の印象からは自分にとって、外国人の人権は近く、考えることがあるようだが、「人種」「差別」は「自分」からずいぶん遠いところの印象に残っているようである。またその一方で、「国際」から「戦争」「問題」は関連しており、「社会」での「将来」の「具体」的な「関心」と示されている。

「学校」「行事」や「文化」祭の「準備」は、ある意味、クラスという「集団」にとって「大切」な役割を果たしているようで、教師が意図した探求的な学びとは言えないかもしれないが、それも「集団」や「グループ」にとって「大切」であると参加者は認識していたようである。

次の図2は、参加者の記述回答と設問「中学校での総合的な学習の時間での学んだことが活かせると思う」に対する4件法回答とのクロス集計を図式化したものである。

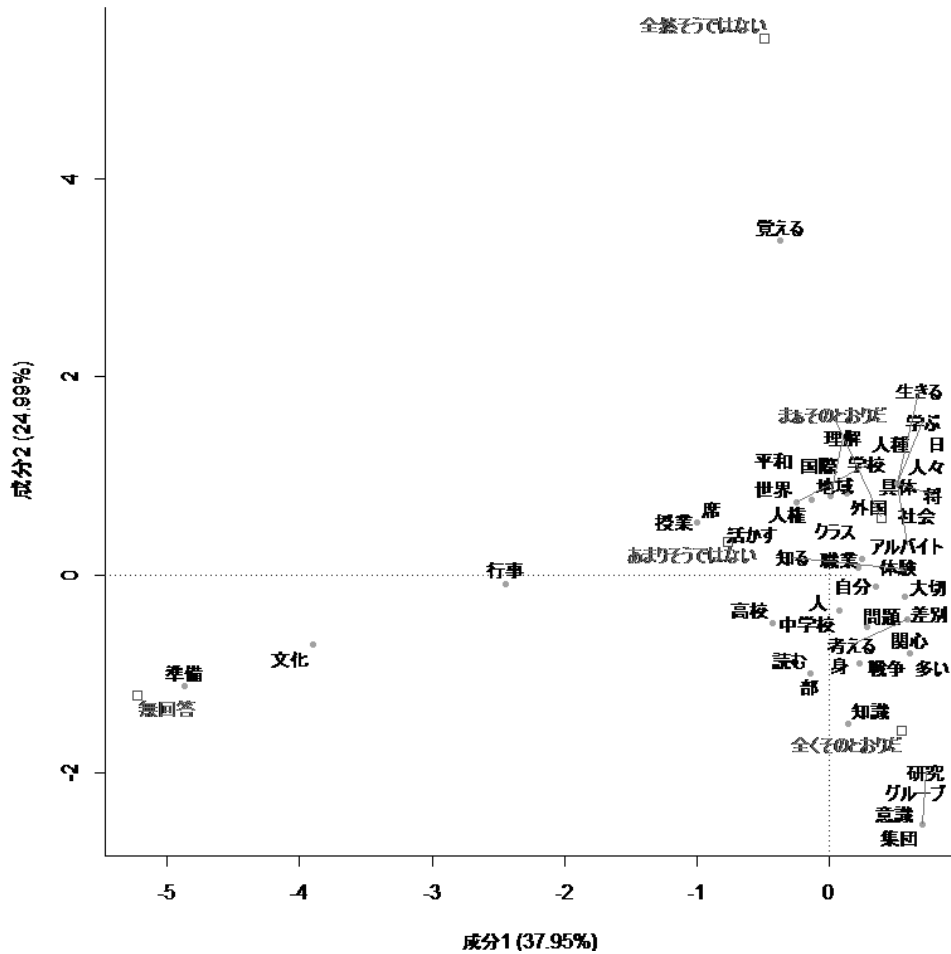


図2：対応分析表（中学校での学びが活かせると思う）

最小出現回数は2とし、最小文書数は1とした。文字が見えにくくなることを防ぎ、バブルプロットのサイズを小さめに設定した。4件法回答の「エ. 全然そうではない」の回答に対応する記述回答は、その周辺に何もバブルプロットがないことから、記述回答をしていないことがわかる。一方、同設問に対して、「ウ. あまりそうではない」の回答に対応する抽出語は、「席」替えや「授業」、マイナス方向では、学校「行事」が見受けられる。「イ. まあそのとおりだ」との回答には、多くの抽出語が周囲を取り囲んでおり、「外国」「社会」「職業」「アルバイト」などが見受けられる。このことから、やはり、中学校での総合学習での学びは「職業」に関わるものが印象に残っていることがわかる。「ア. 全くそのとおりだ」の周辺には、抽出語がさほど散見されず、「知識」「戦争」「研究」といった抽出語しかないことから、中学校での総合的な学習の時間での学んだことが活かせると思うことに対して、最大値の選択肢を選んでいても、果たして、記述回答と強く関係しているとは限らないといえる。

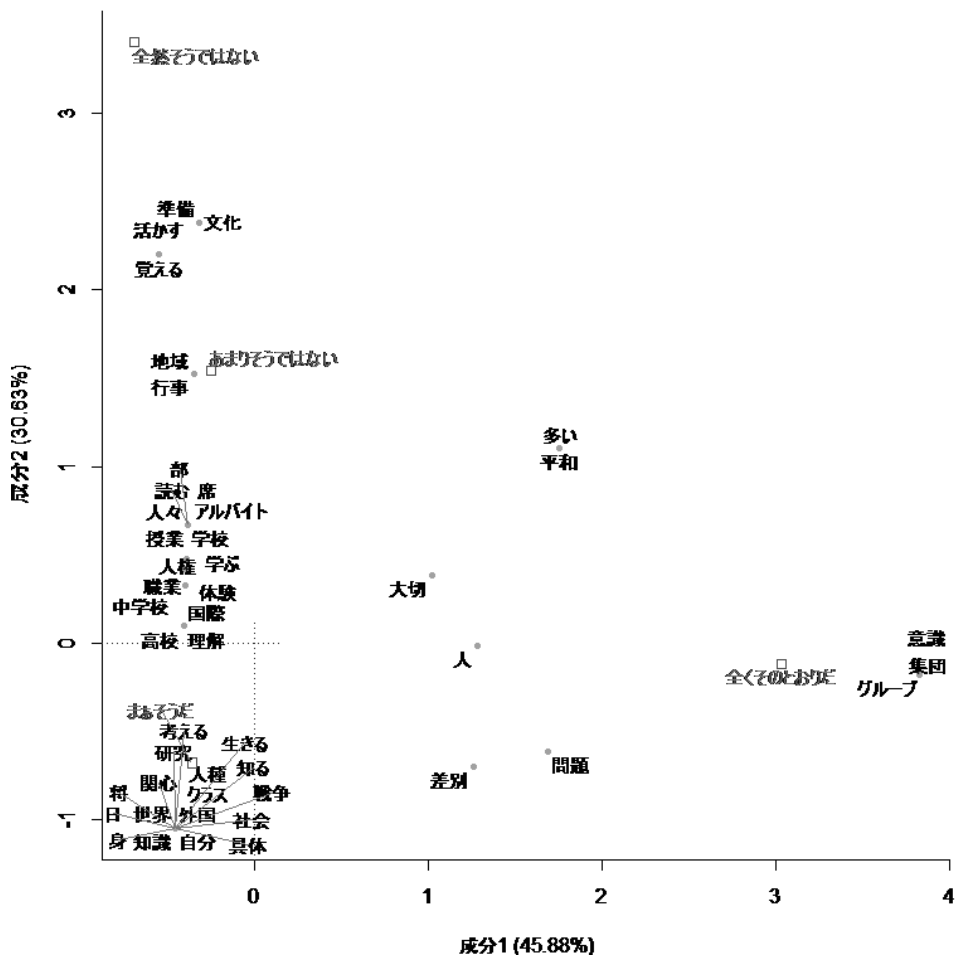


図3：対応分析表（高等学校での学びが活かせると思う）

最後に図3は、参加者の記述回答と設問「高等学校での総合的な学習の時間で学んだことが活かせると思う」に対する4件法回答とのクロス集計を図式化したものである。前掲の図2と同じ設定とし、最小出現回数は2、最小文書数は1と設定した。4件法回答の「エ. 全然そうではない」の回答に対応する記述回答は、その周辺に何もバブルプロットがないが、マイナス方向へ、「文化」祭「準備」や「覚えが」ないという記述がある。同設問への「ウ. あまりそうではない」との回答に対応する抽出語は、「行事」や「地域」の語が見られる。さらにそのマイナス方向では、学校「行事」が見受けられる。「イ. まあそのとおりだ」の回答周囲には、前掲の図2同様、多くの抽出語が散見される。「外国」「世界」「知識」「自分」「社会」など高等学校での総合学習にて学んだことが見受けられる。このことから、高等学校での総合学習での学びは「外国」や「世界」に関わるものが印象に残っていることがわかる。その反対に、「ア. 全くそのとおりだ」の周辺には、抽出語が散見されず、「グループ」「集団」「意識」といった抽出語しかないことから、中学校での総合学習にて学んだことと結果は似通っており、最大値の選択肢を選んでも、果たして、記述回答と強く関係しているとは限らない。ここでの着目点は、「差別」や「平和」「問題」がどの選択肢からも離れていることが見られる。戦争についての学びは指導要領の解説に分類された4項目に該当がなかったので、「5. その他」に分類される考える。最後にこの項目に含めたものとして、「記憶にない」、「何かを学んだという覚えがない」という回答が4件見受けられた。

5. 考察

総合的な学習の時間は、基本的に学校として年間計画をたて、評価も行われる科目である。中学校及び高等学校の担任教員が自身の受け持つクラスに実施する科目である。例えば、英語科教員や理科教員がクラス担任を受け持つ場合、本科目の授業年間計画を学校や地域の特色を盛り込んだ内容を踏まえて設定し、授業を実施し、評価まで慣行しなければならない。中学校や高等学校の学習者が在学中に本科目の成果が実感出来れば幸いであるが、それは多くはないと推測される。本研究の参加者は大学1年生及び2年生なので、高等学校卒業から多くて2年しか経過していないことから、総合的な学習の時間における学びが実感できるようになるためには、さらなる年月が必要なかもしれない。しかし、学習者を追跡出来ないほどの遠い未来のために総合的な学習の時間を工夫せよ、とっているのでは無いようである。全国学力・学習状況調査の分析等において、総合的な学習の時間で探究のプロセスを意識した学習活動に取り組んでいる児童や生徒ほど各教科の正答率が高い傾向にあること、探究的な学習活動に取り組んでいる児童や生徒の割合が増えていることなどが明らかになっている。(MEXT, 2017¹; 6) この報告からも、おおよそ週に1回実施の科目ではあるが、教育らしいこの科目に対して担任教員、学年団、学校全体が改めて再確認してもらいたい。現に、この科目の授業実施時間数は他教科と比較すればかなり少ないにもかかわらず、実際に体験した探究課題の活動事例に対して、中学・高等学校

の校種を問わず、総合的な学習の時間に対する参加者からの肯定的な意見は、そこでの学びが将来への期待ともなっていることが本研究の結果からも明らかとなった。

今回の KH Coder 2 (安定版) を使用したテキストマイニングからもやはり、席替えや文化祭などの学校行事の準備に総合的な学習の時間をあてていた場合、参加者はその学びを忘れていたよりも否定的な印象を持って覚えていることが示された。活動例として「席替え」や「学校行事(文化祭)の準備」「勉強」と回答している参加者(N=4)は総合的な学習の時間における学びが活かせることへかなり消極的であるという結果を得た。それは、福島(2018)でも示唆していたことである。このような事実を踏まえても、授業担当者だけでなく、学校全体で長期的な視野に立って総合的な学習の時間における探求的な学びの価値を再確認することが肝要である。

今回の調査の分析結果と福島(2018)の結果において結果が異なったことは、外部講師に講演を依頼し生徒は講演を聴くという探究活動についてである。今回、それに対して肯定的な印象ではないことが判明した。体育館や大教室に対象学年全員または、全校生徒が集まり、外部講師の講演を聞くことは生徒にとって新鮮であるかもしれないが、探求的な学び、「主体的で対話的な深い学び」となり得るかという点に関して、それには当てはまらないだろう。テキストマイニングによる分析でも、「講演」の抽出語は肯定的な選択肢の周囲に見られなかった。多忙な業務の中にあっても、学校ごとの保有する独自性を活かした創意工夫をし、地域の人々と連絡を密にしながら、調べ学習や職業体験、さらには校区の地域の人々と交流を深めるといった活動をした経験、また、そこでの学びは参加者の意識に肯定的な印象を与えている。つまり、学校及び教員の苦心、工夫は報われていると言える。外部講師の招聘については、文部科学省も外部講師に依存しすぎないようにと付け加えている(MEXT、2018)。

最後に本研究の限界及び今後の課題について述べる。高等学校を卒業後数年経過している本研究の参加者の人数が限られていること、文系の大学生が対象となっていること。出身地に近畿圏が多いこと。そして何より対象が大学生のみであるということは、変数の制御として十分といえない。本論だけで全国民の印象を一般化することが目的ではないため、あくまで一部の意見を精査したと言える。今後求められる課題は、研究の参加者対象を男女比や専攻科目、地域性等の偏りなく⁽³⁾、卒業後の数年間の間に限定して年数がかかっても、地道により多くの参加者のデータを集めることが求められる。参加者の人数が多くなれば、より積極的な総合的な学習の時間の今後の改善点が発見されるだろう。ただ、アンケートの分析に関して、記述回答の抽出語と選択した数値が合致していないことが前述したように今回明らかとなった。4件法で「全くそうは思わない」と選択していても、実際の本人の記述回答とのクロス集計とが合致しない、ということも(参加者の心理的因子が原因で)ある。今後の総合的な学習の時間の学びに関する調査はアンケートが中心となることは先行研究からも明らかである。その際に、安易に選択された番号を数値だけ扱うのは本当の追跡調査の結果が表れるか注意する必要がある。記述回答とのクロス集計で選択された数値と参加者自身が書いた記述回答を丁寧にすり合わせて考慮することも

肝要である。そうすることで、本科目に必要とされている真の課題が浮かんでくると考えている。本研究にて、元学習者たちが総合的な学習の時間での学びが自身の将来に役立つと期待を持っているという結果を得た。このことは、多忙な業務のなか探求課題を年間計画で設定し、実践する教員にとっては励みとなるだろう。さらなる経年変化に注視し、今後の本科目に必要となる課題を精査していく必要があり、それについては稿を改めたい。

注

- (1) 小学校および中学校における総合的な学習の時間は平成14（2002）年度から導入され、学習指導要領の改訂により、校種ごとに段階的に施行され、高等学校における総合的な学習の時間は平成15（2003）年から実施されている。
- (2) 本研究は福島（2018）と同じ理由により、中学校と高等学校における総合的な学習の時間を研究対象としている。両校種のクラス担任による総合的な学習の時間がどのように実施され、それに対して参加者はどのような印象を持っているのかについて調査している。中学校と高等学校の総合的な学習の時間は教科を専門とする担任教員によって授業が行われる。一方、小学校では総合的な学習の時間の基盤となる「生活科」が第1学年・第2学年に設定されており、小学校教員はその生活科及びそれ以外の科目においての基礎を構築した上で、総合的な学習の授業を実施する。これは中学校および高等学校の担任教員とは条件が異なると判断したものである。
- (3) 中学校と高等学校の総合的な学習の時間に実施された内容は校種間で差異があるか、実践された探求課題にはどのような違いがあるかに焦点化するため、高等学校の普通科と専門学科との違いは本研究では取り上げない（普通科であっても専門学科であっても本科目は高等学校における必修科目であり、探求課題内容は学科よりも地域性のほうが因子としては大きいと判断した）。

引用・参考文献

- 朝日新聞・ベネッセ教育研究開発センター（2013）「学校教育に対する保護者の意識調査」（2013年3月28日掲載）。
- 福島知津子（2018）「中学校および高等学校での総合的な学習の時間における学びに関する学習者の事後の意識調査」『大阪女学院大学紀要』第15号、pp.107-119。
- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－』東京：ナカニシ出版。
- MEXT（2004）「総合的な学習の時間の実施状況」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/attach/1397177.htm
- MEXT（2007）「平成19年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1268958.htm
- MEXT（2016）「平成27年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1368193.htm
- MEXT（2016）『中学校学習指導要領 総合的な学習の時間』。
- MEXT（2017）¹『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間』。
- MEXT（2017）²『高等学校学習指導要領 総合的な学習の時間』。
- MEXT（2018）『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』。

- 中野真志・加藤智編著（2015）『改訂版探求的・協同的な学びをつくる－生活科総合学習理論と実践－』
三恵社：愛知.
- 奈須正裕(2017)「内容のポイントと解説」田村学編著『中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』
明治図書出版株式会社、pp. 24-25.
- 高橋亜希子（2019）「高校での学習に関する大学生への回顧質問紙調査－総合的な学習・授業形態・
自主活動・高校での学びに関して－」『南山大学紀要・アカデミア』第18号、pp. 37-55.
- 田村学（2017）『中学校新学習指導要領の展開総合的な学習編』明治図書出版株式会社：東京.
- 七里広志（2018）「BIWAKO TIME（滋賀大学教育学部附属中学校研究報告）：調査研究型の総合学習
が卒業後に与える成果に関する卒業生への世代別追跡調査」pp. 1-16.
- 牛澤賢二（2018）『やってみよう テキストマイニング』東京：朝倉書店.
- 増田有希・平櫛武・小林一木・高田周祐・三浦隆志・黒上晴夫・泰山裕（2018）「総合的な学習の時
間に育成された資質・能力がどのように社会で生かされているか」第44回全日本教育工学研究
協議会 全国大会研究発表論文集 http://www.jaet.jp/repository/ronbun/JAET2018_J-3-10.pdf

付 録

中学校・高等学校における「総合的な学習の時間」に関するおたずね

この「おたずね」の目的は「総合的な学習の時間」に関する研究のために実施するためのものでご協力をお願いします。回答は一切成績に関係はありません。各質問に対して、該当する回答番号（ア～I（オ））を○で囲んでください。また記述箇所は、率直な意見を日本語で書いてください。

0. あなたの現在の学年を教えてください。[大学 1年・2年・3年・4年] ※<○をつけてください>
1. 中学校または高等学校における「総合的な学習の時間」で最も印象に残っているものについて書いてください。活動の内容は、以下にある質問3.を参考にして記入しても良いです
- 【 いつごろ 】 中学校 ・ 高等学校 ※<どちらかに○をつけてください>
- 【 どんな活動をしたか 】 []
- 【 どれくらいの期間 】 1ヶ月未満 / 2～3ヶ月間 / 1学期間 / 1年間 / 複数年間
2. 中学校または高等学校における「総合的な学習の時間」で学んだことが、これまでの生活および、現在の生活に活きていると実感できる。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
3. 上記2. の答えに対し、これまで及び現在にわたり、どのような活動が実際に活かせていますか。 <複数回答可>
- ア). ものづくり・生き物を育てる イ). 地域に貢献する・地域のことを調べる ウ). 国際理解教育/ 環境問題/福祉・健康
- エ). 職業体験・自分史や家族史 オ). その他 []
4. それは具体的にどのように生活体験に生きていますか。できれば、ご自分の体験を紹介ください。
- []
5. 中学校と高等学校における「総合的な学習の時間」の2つを比較すると、その内容に大きな違いがあった。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
6. 上記5. でア)とイ)を選んだ人は、その違いを具体的に書いてください。
- []
7. これからの将来、生活をしていくなかで、中学校での「総合的な学習の時間」の中で学んだことは活かせると思う。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
8. 上記7. の答えに対し、どんな活動が将来、活かせそうですか。 <複数回答可>
- ア). ものづくり・生き物を育てる イ). 地域に貢献する・地域のことを調べる ウ). 国際理解教育/ 環境問題/福祉・健康
- エ). 職業体験・自分史や家族史 オ). その他 []
9. これからの将来、生活をしていくなかで、高等学校での「総合的な学習の時間」の中で学んだことは活かせると思う。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
10. 上記9. の答えに対し、どんな活動が将来、活かせそうですか。 <複数回答可>
- ア). ものづくり・生き物を育てる イ). 地域に貢献する・地域のことを調べる ウ). 国際理解教育/ 環境問題/福祉・健康
- エ). 職業体験・自分史や家族史 オ). その他 []
11. 上記8. と10. で選んだ項目に関して、そのように思う理由を教えてください。
- []

ご協力いただき、ありがとうございました

